木村文助研究

通信　28号　二〇一三・一一・七

北秋田市から資料館へ

七月、北秋田市の佐藤喜美男氏（市老人クラブ連合会長）、米澤一氏（市会議員）が郷土資料館（木村文助コーナー）を訪れ、展示を閲覧し資料の解説を聞きとった。知人の小田切幸一も同行した。米澤氏は一昨年に続いて二度目の来訪である。持参した資料も活用し合川公民館では文化祭に「木村文助コーナー」の展示会を開いている。

木村先生は落合村で生まれ、村は合併により合川町、そして北秋田市となった縁だ。

訪問を終え次の調査地へ向かった。後日両氏から礼状が届いた。北秋田市でも話題が広がりつつあり、北斗市とのつながりを深めたいとの願いも記されていた。（木下）

向かって左から・米澤氏、木下、佐藤氏、小田切氏

〇一三年

五・二　「木村文助研究」通信27号発行。同拡大版を公民館へ展示

七・三　北斗市教育広報「きらめき」No.29に綴り方「父の足」高2高田うめ、自由画「風景」高2白坂喜美男、載る。

七・一三　北秋田市から佐藤喜美男氏、米澤一氏が北斗市郷土資料館を訪れる。（赤い鳥・木村文助コーナー常設展へ調査研究）

七・二三　「北秋田から佐藤さんら訪問　木村文助の功績学ぶ」・函館新聞

八・一　文保研8月例会で前記の件報告

一一・二～三　北斗市民大野地区文化祭、郷土資料館「赤い鳥・木村文助コーナー」へ多数来室閲覧

九・「北秋田市名誉市民　畠山義郎お別れ会」資料届く

畠山氏は「村の綴り方―木村文助の生涯」を著し多数の本を文保研へ寄せられた。

昭和から平成に掛け村長・町長を十一期も務めた方だ。以前から交流が有った。郷土資料館コーナーへ資料・著書を展示中。

2013年(平成25年) 7 月23日(火曜日)
函館新聞

木下会長（右）の説明を聞く佐藤さん（左奥）と米澤さん（左中央）

北秋田から佐藤さんら訪問

木村文助の功績学ぶ

木下さん展示資料解説

【北斗】大正期から昭和初期にかけて大野尋常高等小学校（現大野小学校）の校長を務め、つづり方指導で名声を築いた木村文助（1882～1953年）について学ぼうと、北秋田市から米代川水系縄文遺跡研究会会長の佐藤喜美男さん（78）と同市議の米澤一さん（72）がこのほど、郷土資料館（本町）を訪れ、木村の常設展示コーナーを見学した。

木村は秋田県落合村（現北秋田市）生まれ。大野小校長時代には、つづり方指導に力を注ぎ、多数の教え子の作品が児童月刊雑誌「赤い鳥」に掲載された。

佐藤さんらは函館市内の垣ノ島遺跡に向う途中に資料館を訪問。大野文化財保護研究会の木下寿実夫会長の解説を聞きながら展示資料を見た。木下会長は木村の功績のほか、常設展示を作り上げるまでの過程などを説明。佐藤さんは「とても勉強になった。出生地以外の場所でこれだけの資料が残され、素晴らしい」と感想。木下会長は「功績を残していくことが大事。木村文助を通じてゆかりの地がつながっていけば」と話していた。

（鈴木　潤）

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方(作文)や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

父の足

大野小高二　高田うめ

一週間ばかり前に、父が函館へ青物を売りに行って、帰りがあまりおそいので、家で皆待っていたが来ないので兄たちは明日行く支度にかかった。

少したつと、馬小屋の中で、残して行った子馬の呼ぶ声がする。今度はきっと来たな、と思って見ていたら、家の馬車であった。子馬は一生懸命に呼んでいる。馬車は家の前まで来たので、姉が家から出て行った。私は御飯の支度をして、湯をわかしていたら、外で姉の呼ぶ声がするので行って見たら、父の足から、黒い血がどろどろ流れて、顔を青くして車の上にすわっている。私は急に寒くなったような気がした。

姉が「早く兄ちゃば(にいちゃんを)、呼んで来い」というので、畑に走っていった。兄は、きうり(きゅうり)畑にいて、きうりをもいでいた。私は「兄ちゃ兄ちゃ、早ぐ来てけれど(おくれよ)」といったら、兄はびっくりしたように「何した?」といって来た。父の足のことを知らせたら、心配そうに「車にでも上がられだべが(ひかれてしまったのか)、どうしたんだべ」といいながら、車のかづぼう(かじぼう)を下していた。

兄はちょっとぼんやりして見ていたが、父に「どうしたんだ」といったら、父は何といってよいかわからないようにしてあった(いた)が、頭をかしげて「何もがにも(かにも)、車に上がられて困ってしまった」といった。兄は心配そうにして、車の物を下した。父が家にはいる時、石を三つ拾って、それを炉に焼いて、私に「ここさ(へ)、うんと火たいて湯わかせ」といった。私は「その石何するの」と聞くと、「石ぶがし(石蒸かし)するのだ」といった。それから父にぜん(膳)を出すと「飯も何も食てぐねども(食いたくないけれど)」といって、さっと一ぜんより(しか)食べません。

その内に兄たちが来て、父の怪我したことを聞いた。父はその時、少しの間は黙っていたが「今川越えてからあんまり道に穴があるしけ(あるから)、そこさ(そこへ)敷ぐべと思って、途中から板きれ拾って来て敷ぐね(敷くのに)馬車ば立たせて置いたら、馬蠅うるせあがって(うるさくて)、さっさと来てしまったんだね。馬車の後から前の方さ、つかまって乗るべと思ったきや(たらば)、車穴さ(に)片一方の足落して取る気になっていだ内ね、車渡ってしまって、それでも車さ(に)つかまって乗る気ねなっていだきや(いたら)、又別の足落としてひかれた。それでも馬車さ(に)、乗ってしまった。」といって、父はおかしくなったのか笑っていた。兄たちは心配そうにして、外の方に出ていった。父は焼いた石を湯の中に入れて、そのゆげで足をふかして(むして)いた。夕方になって父は便所に行きたくなったと見えて、杖をついて、ようやく便所まで行った。

(大正十五年一月号)

■ことばの意味

【青物】野菜や青魚のこと。ここでは、野菜を意味する言葉。

【ぜん】一人分の食器や食べ物を載せる台。お膳

風景　大野小高二　白坂 喜美男
(昭和２年８月号)

綴方選評

鈴木 三重吉

高田さんの「父の足」は、村落的生活相の抽出として興味のある作です。

家の馬車がかえると、厩(うまや)に残された子馬が、一生けんめいお母さん馬をよびたてたりするところなどは、われわれには特に面白いし、石を火で熱して、それを湯の中へ入れて、その湯気で打身のところをむしたりする手療法もいかにも地方的な素朴味があります。

実写の上では、お父さんが家へはいって、「ここさ、うんと火たいて湯わかせ」といわれるところや、「今川こえでから、あんまり道に穴あるしけ」から以下、足をふまれるいきさつを話される対話のところなどは、おのおのの言葉の声色までがまざまざと浮かびますし、わだちに引かれた過程も目に見えるようです。表出もすべて純朴で、いい気持です。

自由画選評

山本 鼎

白坂喜美男君の「風景」(推奨次席)、描きなれない筆致は絵を貧相にしているが、気取りのない描写が推奨次席たらしめた。中央の枯木がいい。

(編集・社会教育課 京谷 亨)

赤い鳥・木村文助コーナー

《北斗市郷土資料館内》

北斗市郷土資料館（旧大野町郷土資料室）
０４１－１２０１
北海道北斗市本町２丁目１２番７号
TEL（０１３８）７７－６６８１
閲　覧　９：００～１６：００
休　館　毎月第一月曜、年末・年始、臨時

「林芙美子作短編小説に引用」、
「ラジオ放送に引用」、
「北海道教育史に掲載」、
「短編小説的と評価された」など多数の綴り方を収蔵！

『１９２０年代（大正から昭和初期）の田舎の生活・文化がリアルに表現・・・都会の先生が読むと子どもたちは声も出なかったという』

生活綴り方のふるさとを訪ねてみよう！

（「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書、写真など多数）

○函館方面→車で、国道２２７号を通り大野市街地へ入る
○道北方面→車で、国道５号の大沼トンネルを抜け、１０分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み５分で着く

大野地区市街地の大野小学校門を入り右側木造の建物

発行・大野文化財保護研究会
（略称：文保研・ぶんぽけん）
会長：木下寿実夫
〇四一－一二〇一
北斗市本町３丁目11番32号
（０１３８）７７・８５３５